【症例報告】

成人女性における反対咬合の治療とメインテナンスにおける考察

Consideration on treatment and maintenance of adult female patient with anterior crossbite

キーワード：
反対咬合
機能評価
メインテナンス

Keywords：
anterior crossbite
functional evaluation
maintenance care

常深伸介
TSUNEMI Sinsuke

つねみ歯科医院
兵庫県神戸市北区淡河町淡河 745

成長終了後における骨格性反対咬合の矯正治療には，外科的にアプローチする根本的な方法と前歯の傾斜を伴いながら補償的に対応する方法がある．後者の方法で処置を施した場合，歯根吸収，骨の裂開，歯肉の退縮，後戻りなどのリスクが強く予知性が不確実であることは否めない．

本症例は成人女性の叢生を伴う反対咬合の症例を前歯部の傾斜を伴いながら補償的に是正した症例である．治療後 3 年を経過しメインテナンス状況について資料を採得する機会を得たので，その経過を考察し報告する．

There are roughly two orthodontic treatment options for skeletal reversed occlusion, i.e., surgical approach eyeing for fundamental solution and prosthodontic approach by compensating inclinations of the front teeth. The latter method involves to a certain degree the risks of root resorption, bone dehiscence, gingival recession, and relapse; prognosis predictability is rather low.

This report is to present a case in which an anterior crossbite of an adult female patient was corrected in a compensatory manner with an inclination of the anterior teeth part and was also accompanied by crowding. Based on the clinical documentation of 3-year follow-up, I would like to discuss and report on its progress.

緒言

反対咬合による醜貌は社会生活のうえで対人関係に大きなハンディキャップを負うことになり，これが場合によっては一種の劣等感として心理的に悪影響を及ぼし，心理発達，人格形成に問題となることがある[1)]という報告からも反対咬合という醜貌が精神面に与える影響は軽視できない．

反対咬合（Reversed occlusion）は，外見上，目立つ不正咬合であり小児期より矯正治療を施されることが多いが，可撤式装置を用いることも多く，患者の協力を得られなければ望ましい結果は得られない．

本症例も小児期に治療を試みたが途中で断念し不正咬合を残したまま成人となった症例である．

【症例報告】

矯正治療に伴う不定愁訴に対し，顎位の異常を疑い咬合再構成を行った一症例

A case of comprehensive occlusal reconstruction for indefinite complaint after orthodontic treatment

矢守俊介
YAMORI Shunsuke

医療法人　愛和会　旭川駅前あしたばデンタルクリニック
北海道旭川市宮下通 7 丁目 2399-1　明治屋ビル 5F

キーワード：
臼歯部咬合崩壊
包括的治療
時間軸
咬合支持

Keywords：
posterior bite collapse
comprehensive treatment
timeline
occlusal support

矯正治療に伴う不定愁訴に対し，顎位の異常を疑い，包括的な治療により咬合を再構成した症例を報告する．本例はスプリントを応用して適切な下顎位を模索し，その後矯正治療，プロビジョナルレストレーションを経て最終補綴に至った．その過程と問題点を考察した．

This report is to present a case of reconstructing occlusion by comprehensive treatment for a patient with an indefinite complaint after orthodontic treatment. In this case, we applied a splint in order to search for the proper mandibular position and then delivered orthodontic treatment, provisional restoration and final prosthesis. In this report I discussed the progress and challenges of treatment.

緒言

歯科臨床においては，病因を診断し，その原因を取り除くことにより長期安定した口腔内環境を回復することが重要である．そのためには咀嚼筋のスパズムのとれた適正な下顎位を求め，できるだけ咬合平面を左右に対称的に再構成するとともに，機能的咬合面形態を再現し，機能的にも審美的にも満たされた咬合再構成をおこなうことが重要である．筒井らは[1-3]，口腔崩壊の原因は大きく分けて力と炎症があり，咬合崩壊に絡む個体差を理解するために筒井の分類に従って骨格，筋肉，チューイングについて分類し，パラファンクションなどの力をできるだけ排除することが力のコントロールとして重要であると述べている．筒井[2]によればアングル I, II 級の症例は，咬合崩壊に伴って，下顎は後上方にはまり込んでいくことが多く，逆に下顎が前下方に降りてくると安定する（いわば咬合崩壊の治癒となる）とされている．

今回は，矯正後の不定愁訴に対して，包括的に咬合再構成を行った症例を提示し，その対応と問題点について考えてみたい．

【症例報告】

可撤式装置を用いて小児矯正に取り組んだ一症例

A case of orthodontic treatment for adolescent patient using a removable appliance

帆足亮太郎
HOASHI Ryotaro

帆足歯科医院
福岡県北九州市若松区白山 1-1-5

キーワード：
下顎後退
態癖
アクチバトール

Keywords：
mandibular retraction
habitual behavior
activator

今回，下顎後退を示す成長期の症例について，下顎後退の大きな原因として考えられた態癖を改善する啓発を行いながら，咬合崩壊に至った過程を元に戻すように歯科矯正治療を行った．その結果，下顎の成長が促進されるとともに顎顔面形態の回復が認められた．態癖や上下の歯の深い嵌り込みが本来の下顎の成長を抑制する原因となることが示唆されたとともに，態癖に対する患者の自覚の程度が，下顎後退の矯正治療の効率に影響することも示唆された．

In a case of adolescent patient with mandibular retraction, orthodontic treatment was performed to reverse the process of developing the malocclusion while improving habitual behavior of the cause of the mandibular retraction. As a result, mandibular growth and recovery of the maxilla facial form were promoted. The possible cause of restraint of the mandibular growth was habitual behavior and deep bite. It is suggested that the patient's awareness of habitual behavior may influence the efficiency of the orthodontic treatment for mandibular retraction.

緒言

成長期において下顎の劣成長や歯列不正は深刻な問題となり，筒井の提唱する五大禁忌[1, 2]を惹起する．下顎の劣成長や歯列不正は，審美的な問題はもちろんであるが，機能的な問題も生じる可能性が高い．下顎の後退や舌房の狭窄は，舌根の沈下，気道確保の困難，体のバランスの崩れを招く．崩れたバランスのままでは健やかな成長は期待できない．原因は，先天的もしくは後天的なものに分けられる．後天的な原因としては，主に態癖[3]が挙げられる．そこで態癖指導を行いながら治療介入することにした．